

## 【研究ノート】

# 日本語の「の」の過剰使用の可能性に関する一考察 —中国語の「的」の認可に着目して—

鈴木 一 徳\*

A Note on the Possibility of Overused “NO” in Japanese:  
The Acceptance of “DE” in Chinese

SUZUKI, Kazunori

要旨：本論考は、中国語の「的」の現れ方を通して日本語の「の」の過剰使用の可能性を探るものである。中国語母語話者を対象に調査を行った結果、中国語の「的」は、修飾部の音節が長くなると現れやすくなる可能性を示唆するものであった。この結果に基づいて、日本語学習者に見られる日本語の「の」の過剰使用について検討する。

キーワード：「の」の過剰使用 中国語の「的」 音節数 容認性判断課題  
中国語話者

### 1. はじめに

第二言語として日本語を学ぶ学習者の代表的な誤用の一つに、(1)に示すような「の」の過剰使用が挙げられる。

- (1) a. \*おいしいのラーメン
- b. \*昨日読んだの本
- c. \*太郎が書いたの手紙

(筆者作例)

---

\*すずき かずのり 文教大学文学部英米語英米文学科・非常勤講師

「の」の過剰使用の誤用については、母語からの負の言語転移であるか否かを検証する研究がなされてきた (e.g., 奥野 2005; 白畑 1993; 白畑・久野 2005; 鈴木・山下 2019; ほか多数)。そして、過剰使用される「の」については、言語転移であるか否かという二項対立の議論では十分な説明をすることはできず、結果的には、「の」の過剰使用には、単一的な要因ではなく多層的な要因が複雑に関係していると考えるのが自然である (cf., Wakabayashi 2013)。これまでに行われてきた「の」の過剰使用に関する研究では、名詞修飾部の品詞 (名詞、形容詞、動詞) に着目するものが大半であったが、名詞修飾部の音節の長さに着目した研究は管見の限り存在しない。そこで、本研究では、日本語を第二言語として学んでいる中国語母語話者を対象に、中国語の「的」の認可に関する調査を行う。そして、中国語の「的」の認可の可能性を踏まえて、「の」の過剰使用に関する考察を行う。

本論考の構成は次の通りである。まず、第1節では本研究の目的を述べた。第2節では「の」の過剰使用に関する先行研究を概観する。第3節では本研究の仮説と予測を述べ、第4節では本研究の調査方法について述べる。第5節では調査の結果を提示し、第6節では調査結果に基づく考察を行う。そして第7節では本論考のまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 「の」の過剰使用

「の」の過剰使用に関しては、これまでに、言語転移であるとする説、補文標識の有無が影響しているとする説、発達上の誤りであるとする説がある。以下では、3つの仮説に関する概要をまとめ、未解決の問題を指摘する。

### 2.1. 言語転移であるとする説

言語転移であるとする説については、奥野 (2003, 2005) や迫田 (1999) が提案しているもので、「の」の過剰使用は母語からの負の言語転移であ

るというものである。つまり、学習者の母語の性質を第二言語にも適応させてしまい、その結果として、不適格な構造を産出してしまふことをいう。

例として、(2a)のように中国語は修飾部と被修飾部の間に「的(de)」が生起できるが、日本語の場合は、(2b)に示すように、修飾部と被修飾部の間はゼロ標示( $\phi$ )である。

- (2) a. 新的工作 (中国語)
- b. 新しい $\phi$ 仕事 (日本語)
- c. \*新しいの仕事

(奥野 2003: 81 に基づく)

(2)を例とすると、中国語では修飾部である形容詞「新(新しい)」と被修飾部である名詞「工作(仕事)」との間に「的」を置くことで修飾関係を成り立たせている。しかし、日本語の場合、修飾関係を成立させる上で、形容詞「新しい」と名詞「仕事」との間には何も置くことができない。この場合の負の言語転移とは、中国語の「的」を日本語で「の」として、具現化させてしまうことをいう。つまり、中国語を母語とする日本語学習者は、(2c)にあるような、「新しいの仕事」というような、過剰な「の」を含む名詞修飾構造を産出してしまふということである。

奥野(2003)は、中国語話者、韓国語話者、英語話者の日本語学習者を対象に文法性判断課題を実施し、「の」の過剰使用が言語転移によるものであるかを調べた。その結果、特に上級の中国語話者において「の」の過剰使用が残留していたことから、負の言語転移である可能性を示唆した。

## 2.2. 補文標識の有無が影響しているとする説

鈴木・山下(2019)では、修飾部を節に絞り、主格・属格交替を用いて、過剰に使用される「の」の解明を試みた。修飾部が主格構造の関係節であるか、属格構造の関係節であるかに着目し、(3)のようなリストを作成し、

中国語を母語とする日本語学習者を対象にリスニング形式の容認性判断課題を実施した。

- (3) a. [[先生が書いた]  $\phi$ ]論文 (主格構造)
  - b. \*[[先生が書いた]の]論文 (主格構造・過剰「の」有)
  - c. [[先生の書いた]]論文 (属格構造)
  - d. \*[[先生の書いた]の]論文 (属格構造・過剰「の」有)
- (鈴木・山下 2019: 228 に基づく)

鈴木・山下 (2019) では、主格・属格構造における重要な相違点は、音的に具現化はされないものの、構造上に含まれる補文標識の有無であるという分析をもとに、実験を行っている。(3a) のような主格構造では構造上の補文標識があるので、誤って過剰な「の」を入れてしまうが、(3c) のような属格構造には構造上の補文標識は存在しないため、誤って「の」を挿入してしまう可能性は低くなるという予測を立てている。データ分析の結果、概ね予測と一致し、主格構造の関係節における過剰な「の」を容認する学習者が多かったことから、過剰に使用される「の」の一側面として補文標識の可能性を示唆した。

過剰に使用される「の」が補文標識であるとする説については、日本語の母語獲得研究でも言及されている (Murasugi 1991, 2010)。Murasugi (2010) では、日本語を獲得中の幼児において、(4) のような過剰な「の」を含む文の産出が観察されていると述べている。

- (4) \*とうもろこし食べてるのブタさん

(Murasugi 2010: 29, 原文ローマ字)

Murasugi (2010) は、幼児が過剰に使用する「の」は、英語の関係代名詞で使用するような *who* や *which* などの補文標識である証拠であり、日本語は

関係節の構成において補文標識は不要であることから、幼児の成長に伴って過剰な「の」が減少し、おとなの言語知識に近づいていくと述べている。

### 2.3. 発達上の誤りであるとする説

白畑・久野 (2005) は、中国語、英語それぞれを母語とする子どもの日本語学習者を対象に、発話データを分析する縦断的研究を行った。発話データの分析の結果、中国語話者だけでなく英語話者も、(5)のように形容詞と名詞の間に「の」を過剰に使用したことから、言語転移だけでは説明ができないとし、第二言語としての日本語習得過程での名詞修飾節の普遍的な発達順序の存在の可能性を提案している。

- (5) a. \*大きいスタジアム
- b. \*小さいビルディング

(白畑・久野 2005: 42 に基づく)

白畑・久野 (2005) の重要な観察は、英語で「大きいスタジアム」と言う場合、*a big stadium* のように形容詞と名詞の間には何も現れていないのにもかかわらず、日本語で言う際には「大きいスタジアム」と誤って産出してしまうものである。母語の英語に存在しない要素を、第二言語の日本語で産出してしまうということは、言語転移の観点からは説明が困難である。そして、この過剰な「の」については、あらゆる母語を持つ日本語学習者でも起こり得る普遍的な発達上の誤りである可能性を示唆した。

### 2.4. 未解決の問題

中国語を母語とする日本語学習者によって過剰に使用される「の」が転移であるか否かを断定するには、まず、母語である中国語の名詞修飾の仕組みを明らかにする必要がある。奥野 (2003, 2005) では、修飾部の品詞を名詞、形容詞、動詞の3種類に統制し、「の」の過剰使用が起こりやすい品

詞の分析を行っている。また、鈴木・山下(2019)では、修飾部を節で統一し、「の」の過剰使用の傾向を探っている。しかし、両者共に、品詞や文法構造の知識は有しているという前提で実験を行っているため、より本質的に修飾部と過剰使用される「の」の関係を検証する必要がある。つまり、中国語で「的」を用いるか否かを、実証的に解明し、それが明らかになって初めて、過剰使用される「の」が言語転移か否かを検証できるのである。

中国語における「的」の現れ方を、品詞や文法構造に頼らない形式で調査することは、第二言語としての日本語における「の」の過剰使用の原因解明に寄与すると考える。そこで、本研究では、修飾部の音節の長さに着目し、中国語の「的」の現れ方を検討する。

### 3. 研究課題と予測

本研究の研究課題を(6)に記す。

(6) 中国語の修飾部の音節の長さは、「的」の現れ方に影響するか

研究課題に対する予測は、以下(7)の通りである。

- (7) a. 修飾部の音節が長くなると、「的」が必要になる  
b. 修飾部の音節が短くなると、「的」が不要になる

以上の研究課題および予測をもって、実際に調査を行った。

### 4. 調査

#### 4.1. 調査参加者

本研究の調査参加者は、言語学や日本語教育に関連する領域を専門としない中国語母語話者10名であった。参加者は日本の大学または大学院に在籍する留学生であり、平均年齢は23歳(範囲:21~29歳)であった。なお、

本研究の目的は、中国語母語話者を対象に中国語の「的」の現れ方を検証するものであり、参加者は中国語母語話者であるため、中国語の習熟度の測定は行わなかった。

## 4.2. 方法

本調査では、リスニング形式の容認性判断課題を用いた。音声は、中国語を母語とする成人男性のものを録音し、PowerPointのスライドショーで呈示した。回答する際は、回答用紙に「OK」または「NG」の2段階で判断するように教示した。問題は(8)に示す通り4タイプあり、合計で64の刺激を作成した。なお、品詞や文法構造にとらわれずに「的」の現れ方を検証するために、修飾部には無意味語または名詞を修飾する機能を持たない語を選択し、被修飾部には実在する名詞を選択し、名詞修飾であることは明示的にした。

- |                            |              |
|----------------------------|--------------|
| (8) a. Type A: zhāo de qiú | (x de ball)  |
| b. Type B: zhāo φ qiú      | (x φ ball)   |
| c. Type C: lì měi de yú    | (xx de fish) |
| d. Type D: lì měi φ yú     | (xx φ fish)  |

Type Aは修飾部が1音節で「的」を伴う構造、Type Bは修飾部が1音節で「的」を伴わない構造であった。また、Type Cは修飾部が2音節で「的」を伴う構造、Type Dは修飾部が2音節で「的」を伴わない構造であった。

実際の調査では、ミニマルペアの呈示を避けるため、リストを2つ作成して調査を実施した。そのため、例えば、同一参加者が(8a)と(8b)の両方について判断することは無かった。したがって、実際の調査では、参加者1人あたり32問の項目を判断した。また、PowerPointで音声呈示をする際に、画面上には被修飾部である名詞の絵も表示した。調査は、参加者のペースで進行したが、15分程度で実験を終えていた。

## 5. 結果

図1に、タイプごとの容認率を示す。Type A (1音節・「的」有り)の容認率は66.3%、Type B (1音節・「的」無し)の容認率は58.8%、Type C (2音節・「的」有り)の容認率は63.8%、Type D (2音節・「的」無し)の容認率は53.8%であった。対応なしの一元配置分散分析を行ったが、有意差は確認されなかった。

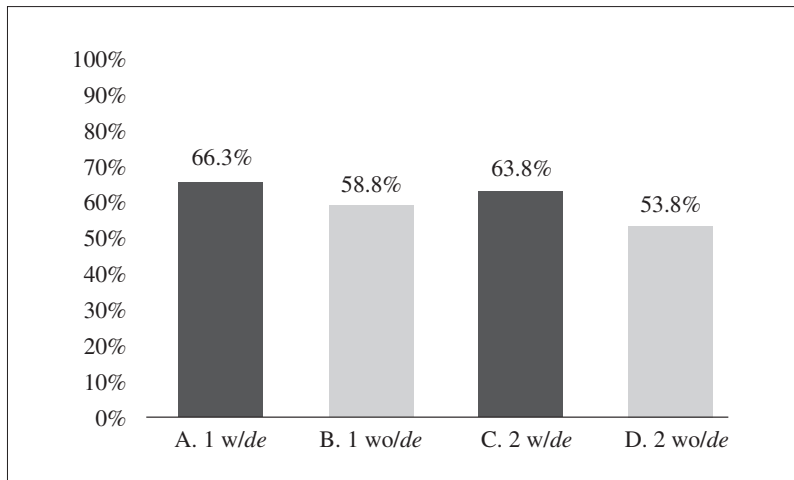


図1 容認率

表1に、各タイプにおいて、一貫して容認傾向を示した参加者の人数を算出した結果を示す。各タイプには8つの項目が含まれているが、そのうち5つ以上 (62.5%以上) について「OK」の回答を示した人数を計上している。Type A (1音節・「的」有り)は10人中6人 (60%)、Type B (1音節・「的」無し)は10人中6人 (60%)、Type C (2音節・「的」有り)は10人中8人 (80%)、Type D (2音節・「的」無し)は10人中5人 (50%)であった。



表1 一貫して容認した人数

タイプ	人数 (%)
A. 1 w/de	6/10 (60%)
B. 1 wo/de	6/10 (60%)
C. 2 w/de	8/10 (80%)
D. 2 wo/de	5/10 (50%)

## 6. 考察

第5節の結果をもとに、中国語の「的」の現れ方の傾向と、日本語の「の」の過剰使用の可能性について検討していく。

図1の全体の容認率の結果については、統計的に有意な結果は示されなかったが、数値的には一貫して名詞の前に「的」を置いた方が容認率が高いということが窺える。しかし、図1の結果からは、音節の長さが「的」の現れ方に影響しているかは分からない。

表1の一貫して容認傾向を示した人数を算出した結果からは、修飾部が1音節の場合は「的」の有無に差は無いことが分かった。さらに、修飾部が2音節の場合は名詞の前に「的」がある方が、「的」が無い場合よりも一貫して容認されていることが分かった。この結果から、名詞の前の「的」の現れ方は、修飾部の音節の長さに依存している可能性を示している。つまり、修飾部の音節が長ければ「的」をより必要とする一方で、修飾部の音節が短ければ「的」を不要としていることが考えられる。

この結果について、日本語の「の」の過剰使用に照らし合わせて検討をしていく。品詞の特性にかかわらず、名詞修飾部の音節が長くなればなるほど「的」が必要になるということは、日本語においても修飾部が長くなればなるほど「の」の過剰使用が多くなる可能性がある。実際、奥野 (2003) では、中国語を母語とする日本語学習者は、修飾部が動詞の場合に「の」の過剰使用が起りやすいことを報告している。奥野 (2003) の文法性判断課題で使用された調査項目を見てみると、動詞の例 (「子供を持ってい

るの親」「明日観るの映画」など)は、形容詞の例(「汚いの部屋」「難しいの選択」など)と比較すると、修飾部が物理的に長いことは明らかである。奥野(2003)で得られた「修飾部が動詞の場合、『の』の過剰使用が起りやすい」というのは、単に物理的な音節が影響している可能性もあり得る。また、鈴木・山下(2019)でも、「先生が書いたの論文」「娘が落としたの財布」のように修飾部に節を使用しているため、これも単に物理的な音節の長さが影響していると考えられることもできる。

## 7. おわりに

本研究は、中国語の「的」の現れ方を通して日本語の「の」の過剰使用の可能性を探るべく、中国語母語話者を対象に調査を行った。調査の結果、中国語の「的」は、修飾部の音節が長くなると現れやすくなる可能性を示唆するものであった。この結果に基づいて日本語の「の」の過剰使用について検討したところ、修飾部の音節の長さが「の」の過剰使用に影響をしている可能性を示唆するものであった。

今後は、中国語の「的」の現れ方と日本語の「の」の過剰使用との関係をより緻密に調査を行う必要がある。まず、中国語の調査において、本研究では修飾部を1音節と2音節でしか検討していないが、3音節以上の項目を作成し、調査を行い、「的」の現れ方についての追調査をする必要がある。また、同一の参加者を対象にして、中国語の「的」の現れ方の傾向と日本語の「の」の過剰使用との相関関係を見ることで、さらに音節の長さとの過剰な「の」の関係を調査することができる。

## 付記

本稿は、2019年7月27日に甲南大学で開催されたMAPLL-TCP-TL 2019におけるポスター発表をもとに、大幅に加筆・修正を施したものである。本研究の一部は、日本学術振興会による科学研究費助成事業研究活動スタート支援(21K20018, 研究代表者:鈴木一徳)の助成を受けている。本

研究の実施計画は、東京工業大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の審査を経ている。なお、本稿における誤りや不備はすべて筆者の責任である。

## 謝辞

本研究の調査に協力してくださった調査参加者の皆様に感謝申し上げます。また、本研究の内容および実験項目作成において、陸嘉良氏からは、有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

## 参考文献

- 奥野由紀子 (2003) 「上級日本語学習者における言語転移の可能性—『の』の過剰使用に関する文法性判断テストに基づいて—」『日本語教育』116, 79-88.
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究—日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に—』東京: 風間書房.
- 白畑知彦 (1993) 「幼児の第2言語としての日本語獲得と『ノ』の過剰生成—韓国人幼児の縦断研究—」『日本語教育』81, 104-115.
- 白畑知彦・久野美津子 (2005) 「L2児童による日本語名詞句構造内での『ノ』の習得」, *Second Language*, 4, 29-50.
- 鈴木一徳・山下順子 (2019) 「中国語を母語とする上級日本語学習者による『の』の過剰使用—主格・属格交替現象に基づく分析—」『日中言語対照研究論集』21, 224-238.
- 張麟声 (2012) 「日本語の『の』と中国語の『的』における双方向習得研究 (1) —修飾部が指示詞である場合など3ケースを例に—」『中国語話者のための日本語教育研究』3, 1-17.
- Murasugi, K. (1991). Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition. Unpublished doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Murasugi, K. (2010). The onset of complex NP in child production. *MIT Working Papers in Linguistics*, 61, 27-47.
- Wakabayashi, S. (2013). Why do we need a linguistic theory to describe learners' behaviors? *Second Language*, 12, 81-108.

付録: 調査項目一覧

修飾部が 1 音節の項目	修飾部が 2 音節の項目
zhāo {φ, de} qiú	è xié {φ, de} māo
yǔ {φ, de} bǐ	xíng liú {φ, de} hé
hú {φ, de} shǒu	lì měi {φ, de} yú
xù {φ, de} xióng	mì shén {φ, de} tóu
chāng {φ, de} shū	chūn qīng {φ, de} chē
zé {φ, de} huā	liè jī {φ, de} hú
zǐ {φ, de} jiǎo	yì rèn {φ, de} gǒu
xíng {φ, de} shuǐ	měi jīng {φ, de} shù
chéng {φ, de} kǎo shì	huá háo {φ, de} yīn lè
kē {φ, de} péng yǒu	mò yōu {φ, de} zhào piàn
guō {φ, de} yǎn jìng	jìng gǎn {φ, de} dì zhí
shǒu {φ, de} lǎo shī	héng yǒng {φ, de} yóu hū
liú {φ, de} fēi jī	kào kě {φ, de} shǒu biǎo
kě {φ, de} jì huà	hú mó {φ, de} fǒu tóu
lín {φ, de} diàn yǐng	chàng liú {φ, de} xué xiào
rèn {φ, de} yī fú	qiē qīn {φ, de} mào zǐ